

## 残したらあかん

大森 海太

私は根がいじ汚いせいか、出されたものは（原則として）残さず完食することになっている。というか、食べ残すことは何か気が咎めるようで、罪悪感を覚えるのである。よくホテルの朝食バイキングで食べきれないくらい取ってきて残す人がいるが、怪しからんことである。私はアジの干物は骨までしゃぶって食べつくすし、イワシなどの小魚は頭から尻尾まで全部腹におさめる。

小魚について言えば、何千匹という稚魚が群れを成して泳いでいるのを、テレビで見ることがある。彼らはプランクトンなどをエサとして成長するのだろうが、あの中で最後まで天寿を全うするのは何パーセントくらいいるのだろうか。大きな魚や鳥のエサになってしまうものが多いだろうが、なかには漁師の網にかかって捕まえられてしまうものもある。食卓の皿に横たわっているのは、気の毒にも志半ばにして無念の最期を遂げた魚たちの残骸である。食物連鎖と言ってしまうえばそれまでだが、輪廻転生、せめて人間の体の一部となって終わってもらいたい。残飯となってゴミと一緒に捨てられるなど、もつてのほかだ。

魚を例に挙げたが、牛や豚の肉、さらに野菜や果物だって生き物としては同じこと。人は食物連鎖の頂点にあることを自覚してかかるべきであろう。

ところがスーパーマーケットあたりでは、まだ食べられるのに賞味期限を気にして廃棄してしまうことが多いという。最近では改善の傾向があると聞くが、どんなものだろう。

そうかと思うと世の中には妙な風習の国があって、宴席で客が完食するのはホストとして恥ずかしいことなのだそう。逆に食べ残しが多いほど満足するというのだが、見栄っ張りの文化というしかない。

話は全然違うけれど、夕食のときウチの孫たちはすぐに食べ残す。

「コレきらい」「おいちくない」

「ダメ！ せっかくばーばが作ったんだから、全部残さずに食べなさい」

「やーだ」

困ったものだと思いつつ、じーじは黙々と孫の残したものを平らげる。